なかむら　みはる
中村三春

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文第273号
学位授与年月日	平成23年10月13日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**新編　言葉の意志　有島武郎と芸術史的転回**
論文審査委員	（主査） 教授佐藤伸宏　教授佐倉由泰 教授佐藤弘夫

論文内容の要旨

序　言葉の意志

本論文は、日本近代の重要な作家である有島武郎（一八七八～一九二三）の小説（童話を含む）と思想とを、主としてテクスト様式論の立場に基づき、（1）**創造的生命力**、（2）**小説構造論**、（3）**芸術史的転回**、（4）**表象のパラドックス**の四つの問題に重点を置いて論じたものである。テクスト様式論の立場とは、文芸様式を作者による芸術意志の表現と単純に見なしてきた伝統的な様式論に対して、文体・レトリック・語りなど、テクスト自体の表意作用に大きく留意する方法を指し、文芸学における様式論を拡張するものである。

（1）創造的生命力に関しては、生命力に基礎を置いた有島の芸術論を、創作史の展開における変化に即して解明し、その世界観および芸術観的な意義を究明するものである。（2）小説構造論の面では、有島が文芸の言語的構築に意識的な作家であったことから、多種多様を極めるその小説群を、記号学からポスト記号学までの理論水準を以て再評価することに努める。（3）芸術史的転回の問題とは、言語の不透明性という事態に依拠し、テクスト自体の表意作用を最大限に解放せしめようとした有島の営為を、二十世紀における印象派から表現主義への芸術史的転回において位置付け直そうとすることである。（4）表象のパラドックスについては、テクストが独立した強度を獲得する時、それが主体から切断されてしまう点において、有島文芸は現代において表象が抱え込まざるをえないパラドックスを体現している。それを後期の有島が追究した、第四階級の文学の台頭期における知識人の存在理由と絡めて再検討することが必要となる。

有島の文芸様式はこのように、芸術における近代の総決算であると同時に、現代の出発点であるような限界的な姿をさらしている。本論文は、以上のような論点にわたり、有島文芸の現代的な評価を目指

すものである。

序論Ⅰ「色は遂に独立するに至つた」――有島武郎文芸の芸術史的位置

出発期から一貫してポスト印象派以降の芸術動向に共鳴していた有島の芸術思潮史的な位置付けを、ダダ・未来派・表現派・大正アヴァンギャルドの作家・作品との関連において再定位する。特に、「惜みなく愛は奪ふ」（一九二〇）における未来派評価に着目し、その要点を、テクストにおけるシニフィアンの独立、および「個性」とテクストとの切断の両面から分析する。この観点から、「かん〜虫」（一九一〇）の印象派的文体、「カインの末裔」（一九一七）・『或る女』（一九一九）などにおける生命力の尊崇、さらに『星座』（一九二二）における「意識の流れ」の手法に至る小説構造の展開を概観する。また、晩年の諸テクストにおいて、シニフィアンの独立によって意味や主体が不明確となる現代的表象のパラドックスを看取し、その限界性そのものと芸術史的転回の実態を解明して、「或る施療患者」などの後期小説を新たに評価する。

序論Ⅱ「魂に行く傾向」――有島武郎におけるウォルト・ホイットマンの閃光

受容・影響関係を問題とする比較文学の手法を用いて、有島の文芸・思想形成に大きな力を持ったホイットマンとの関係に焦点を合わせる。アメリカ留学中に知った『草の葉』（一八五五）の詩人について、有島は独自の研究を続け、多くの評論・評伝や二巻の訳詩集を発表したほか、その精髄は自らの文芸様式にも取り込まれている。「ホイットマンの一断面」（一九一三）・「草の葉（ホイットマンに関する考察）」（同）など初期の評論においては、進化・成長する「魂」という生命論的な見方に彩られていたが、後年の「ホイットマンに就いて」（一九二一）に至ると、無政府主義的な永久革命者としての規定へと変化してゆく。これは講演「泉」（同）の「芸術的衝動」論の方向性と合致し、「宣言一つ」（一九二二）の第四階級論を準備するものでもある。晩年の評伝「ワルト・ホヰットマン」（一九二三）におけるいわば静的自然としての見地は、能産的自然に基づく生命力論の限界を示し、虚構＝人工的芸術への憧憬と軌を一にするものとなる。

序論Ⅲ係争する文化――「文化の末路」と有島武郎の後期評論

「文化の末路」（一九二三）は、人間の文化の発展を、民族の若さによる民衆の合同力によって伸びる第一の時期と、民族が老いた衰退期、すなわち天才・英雄など「専門的人物」によって導かれざるをえない第二の時期に分ける。だが、第二期における「専門的人物」の個性は民衆と乖離し、やがて民衆は自己実現の方途を失って破滅せざるをえない。これら有島の後期評論は、かつての自らの生命力論に対する批判、英雄＝前衛主義の否定、啓蒙の限界を言明する点において、自己批判とともに第四階級の文芸理論をも根本的に批判し、否応なく表象が帯びざるをえない係争性を核心としている。それによれば、文化とは「〇〇」であると語れるものではなく、各種係争の過程でしかない。有島自身は、これほど主体論と代行・表象の限界性を認識しつつも、その軛を完全に脱することはできなかった。しかし、分裂的係争を身に帯びた有島のテクスト群は、そのような多種多様化を実践した点において、真に豊饒な表現性を獲得しえたと言うべきなのである。

1　過激な印象画――「かん〜虫」

最初期の短編「かん〜虫」の文体には、言葉による陽光と色彩の重視、原色の対照、陽光の時間的変化などの点から、作中に名前の見えるモネの印象派絵画との共通性が認められる。文字を解し知識層

に属すると思われる語り手は、他の作中人物の労働者たちとの間に距離があるが、この距離を乗り越えて「連帯」（まきぞへ）となる作用そのものが、このテクストでは構造化の作用ともなっている。すなわち、題名（「虫」）にも示される不当な階級格差への不満が、この小説の物語における資本家が労働者の娘を妾にしようとすることへの不満として明確化され、バラバラの細部が一つに統一される様相は、まさしく印象派の筆触分割や点描画法に準えられる。このようなリアリズム最後の段階の様式性と緊密な劇的構成をもつこの短編は、以後の有島創作史が、このような調和を次第に崩して行く出発点となるのである。

2　生命力と経済――「お末の死」

札幌の貧民街の理髪店「鶴床」を舞台とする短編「お末の死」（一九一四）は、次々と家族が死んでゆく貧しい家庭の中で、唯一生命力に満ちた少女が、その生きようとする意志にもかかわらず自ら死を選ぶ道筋を、主人公の属性と外的環境とを対比的に並列して、矛盾に満ちた形象を形成する弁証法的文体によって描いている。物語の基盤は、少女的な身体と生命力との両義性に代表される境界領域に設定される。弟に胡瓜を食べさせたために赤痢で死なせたことによって、お末は家族から疎隔する。人物の存在基盤の崩落を、このような対位法的な構成に従い、順次、結末に向かって求心的に緊張感を盛り上げる文体によって物語る悲劇のミュートス（物語構造）は、有島の小説全般に通じるものである。「お末の死」は、そのような有島的な悲劇のミュートスの成立を告げる小説である。

3　不透明の罪状――『宣言』

長編『宣言』（一九一五）は、日本近代文学には数少ない本格的な往復書簡体小説である。暉峻康隆、ルッセ、トドロフらの書簡体小説論を援用し、書簡体小説の解釈は、発信者（作中人物）の対他意識を大きく考慮に入れ、表意作用が人物と読者の二重の宛先をもつものとしなければならない。Ｙ子をめぐって三者関係に陥るＡとＢが手紙のやり取りを行い、Ｙ子宅に同居したＢがＡに対して自分の本心を隠蔽しつつ漏洩させ、この二重の表意作用を最大限に活用する仕方で物語を構築している。彼らは規範意識のために内面と外面が著しく分裂しており、その有様をこのテクストは、書簡体小説の二重の表意作用と、長い「引き延ばし」（トマシェフスキー）の手法によって緊張を高め、最後に暴露してカタルシスを迎えるプロット構成によって表現する。その結果、倫理的な条件と書簡体という形式面の条件とが契合したテクストとなっている。

4　永遠回帰の神話――「カインの末裔」

主人公の広岡仁右衛門は、松川農場の秩序（構造）に対する外部性を帯びているが、それに対応する言語的性質として「沈黙」が挙げられる。自然や動物に基づく比喩表現が頻出し、人間と自然とは、比喩表現における「構造」の系列と「混沌」の系列との対比によって描かれる。「沈黙」の人物である仁右衛門は自然の系列に属するが、農業技術のエキスパートであることから、それと決定的に離反する。だがこの隠喩的な世界において、最終的に自然は反対物をも飲み込む包容力を付与され、仁右衛門もそこに帰還する者となる。他方、どこからともなく松川農場に現れ、どこへともなく去ってゆく仁右衛門は、旧約聖書「創世記」の、放浪を余儀なくされる農夫カインの祖型反復としてあり、エリアーデの言う「永遠回帰」の様相を帯びる。この構造は、聖書の芸術的価値の独特な現代的再生にほかならない。

5ａ　迷宮のミュートス――『迷路』

ダンテの『神曲』を原型とした教養小説的な構造をもつと言われる長編『迷路』（一九一八）は、結局は確固とした目的追求のない、探求のための探求を旨とするジャンルに属する。それは自分自身が迷宮となる「オイディプス型」（山路龍天）の探求者である。日記体と三人称小説文体とを組み合わせ、主人公Ａのアメリカ体験を語る『迷路』において、Ａは自己確立を求めながら最終的に何者でもない自分を発見する。その過程においてこのテクストは、観念界／現実界、自由論／決定論、成長欲求／内部規範などの二元論的対立と、反制度的個人、キリスト教離脱者、成長欲求の解放、悲劇のミュートスなど、有島の様式原理を明確に呈示した原型的な小説として位置づけられる。

5ｂ　楕円と迷宮――『迷路』

言葉の不透明性とジャンル的パロディ性とを備えた現代小説の様式は、言語論的転回を代表する言説形態として理解できる。小説はフレームの戯れを核心とするジャンルである。迷宮と並んで、完成からの逸脱、解決からの離反のイメージを提供する図形は楕円である。観念界／現実界、自由論／決定論など、常に二つの中心に引き寄せられる『迷路』の文体・構造・人物は、まさに楕円＝迷宮的と言える。特に、「アイデンティティとセクシュアリティの物語」（江種満子）とされてきた『迷路』は、まさにその物語を幾重にもわたり自ら脱臼せしめる。しかしそのことはこの小説の虚妄を示すのではなく、むしろ最も小説らしい小説として評価する徴表と見なすべきである。

6　想像力のメタフィクション――「生れ出づる悩み」

画家・木田金次郎と有島との交遊を語った私小説的な読解が横行していた短編「生れ出づる悩み」（一九一八）は、実は、想像力によって他者の生を描くことができるとする同感作用を、同感内容と同時に表現したメタフィクションとして読むことができる。語り手の作家「私」と漁夫画家木本の生のあり方は、芸術活動に対する自信と自己不信との葛藤を抱えている点において共通し、テクストは同型対応の二重構造を呈する。またこれは、文芸創造は人類的かつ超階級的であるとする有島の創作理念の帰結でもある。ただし、結末で「私」が想像の限界を自ら語る一節からは、生命力や芸術観を単純に自己と他者との間で共有するものととらえていた文芸理念が後に放棄され、「宣言一つ」の自己批判に至る萌芽が垣間見られるとも言える。この小説はメタフィクション構造とともに、そのような表象のパラドックスの先取としても評価できるのである。

7　悪魔の三角形――「石にひしがれた雑草」

Ａ・Ｍ子・加藤による姦通の三角関係を取り扱う短編「石にひしがれた雑草」（一九一八）は、従来は性心理学の演習とばかり見なされてきたが、ジラールの欲望の三角形の構図にあてはまる典型的な人間関係小説として再評価できる。「悪魔の眼」と呼ばれる語り手兼主人公Ａの語り口は、このような欲望の模倣と媒介の構造と、欲望圏が重なる二重の媒介（いわゆる三角関係）の様相とを緻密に描き出す手法を指す。人間相互の不可視性を前提として、行動・経験を他者・他物との関係によって発生するものとしたＲ・Ｄ・レインの見方の通り、Ａの主体や愛情なるものは、すべてロマネスクな構図の中にしか見出しえなかった。このような関係性のパラドックスこそ、有島の生命力論が、独特の小説構造を与えられた結果として実現されたテクスト様式の重要なポイントなのである。

8ａ　コケットリーの運命――『或る女』

ジラールの三者関係論や作田啓一の小説社会学などを援用しつつ、コケットリーの表現的価値の面から、有島の代表作長編『或る女』を再考する。主人公・早月葉子は女性の自立を求めて、「チャーム」（肉体性）と「タクト」（関係性）から成るコケットリーを武器としてユートピアを探求した。だがこのようなロマンス的な方向性は、彼女自身の内部における「家」の浸透力によって骨抜きとなる。葉子は、渡米途中に船の事務長・倉地と奔放な愛欲に溺れるが、その後の成り行きは、結局かつて彼女が嫌悪感をもって拒絶したはずの、「家」の主婦となる道筋の追随に過ぎなかった。それをこのテクストは、葉子が子宮病とヒステリーという各々肉体（「チャーム」）と関係（「タクト」）の失墜に見舞われるという小説的な設定によって描き出す。コケットリーがジェンダー社会の模倣によって形成された以上、彼女は男性の歓心を買いそれを逆手に取ることでしか自分を位置付けえないのである。まさしく『或る女』は「ロマンスのパロディ」（アンドラ）にほかならない。このような仕方でこのテクストは、評論「一つの提案」（一九二〇）以降の有島の女性論に見られる、女性解放を何よりも女性自身の生命に根ざした主体性によって実践することを求める態度に基づき、しかもそのような展望をその困難性とともに表現したものと認められる。テクスト分析をジェンダー批評と緊密に結びつけて、『或る女』を再評価した論考である。

8ｂ　無限の解釈項――『或る女』

早月葉子を「東欧羅巴の嬪宮の人のやうに」と表現する比喩が登場するが、その意味は極めて多義的で収束を見ない。「ハプスブルグ王朝のような華麗な後宮」と解釈すれば、葉子の華美・粉飾とその没落を暗示する。また、「嬪宮」は天皇・王（男性）のために存在する女性のための御殿であり、男性の欲望を挑発する仕方で手玉に取ろうとするコケットリーと、それによる男性への従属をも共示する。『或る女』のレトリックは、それ以外も含めて、ジェンダー的な二重規範を顕著に浮かび上がらせて社会的セクシズムのコードを迂遠な形で指し示し、テクストに導入する。ただし、それは否定すべきものを全面的に受け入れ、利用し、別の水準では否定するというパラドックス的な営為である。ジェンダーとレトリックが連携するこの様式により、テクストの言葉と読者との間には、無限の接触の回路が開かれる。本章では、ジェンダー批評と修辞批評との交錯点に『或る女』の特徴を究明している。

8ｃ　〈考証〉『或る女』はいつ始まるか

精読を要求される『或る女』研究において、物語展開がいかなる年月の範囲に設定されているかが、実は確定されていない。明治三十四年から翌年にかけての物語として設定されていることは明らかであるが、九月二十二日から七月二十五日までの説（西垣勤）と、九月二十三日から七月二十六日までの説（山田昭夫）とがある。精緻に読み直すことにより、九月二十一日を含めそれ以前数日から、七月二十五日または二十六日（数え方の問題）として考証できる。この曖昧さは、有島の緻密さの度合いにも由来する。ただし、特に冒頭の横浜行きの部分は、その後の物語全体を反転的に先取する原型的な物語を提供していることも重要である。

9　他者としての愛――「惜みなく愛は奪ふ」

有島の代表的なこの長編評論に脱構築的な読解を適用した場合、核心部分で展開される三段階（「習性的生活」「智的生活」「本能的生活」）の生活進化論において、理想とされる「本能的生活」は、実体として「在る」状態ではなく、漸次それに接近する「成る」過程としてしか現れない。しかし、「内部」

絶対の思想が、実は外部＝他者の介在を常に要求する論理によっていることは、むしろこの評論を独善から救う契機となる。また、「個性」と表現とが契合し、シニフィアンが全面的に独立した、理想的な芸術潮流として有島は未来派を挙げる。独立したテクストは、いわば他者としての位置を占め、これが他者としての愛として、表現行為と表現とを切断する。従ってこの評論は、通説のように単純な生命思想ではなく、そのような表象のパラドックス自体が表象の核心をなすに至る一九二〇年代以降のアヴァンギャルド芸術の理論でもあり、またそれが有島の文芸様式にとっていかに本質的で重要な意味を持つかを語るものである。

10　こどもに声はあるか――「一房の葡萄」

主人公の「僕」を良い子にした先生の「愛の力」（片岡良一）を主題と見なしてきた従来の「一房の葡萄」（一九二〇）の牧歌的な読解に対して、生徒たちと先生が作り出す学校空間の特異性からこの童話を読み直す。語り手「僕」は犯人であると同時に暗黙の弁護人的機能も果たし、「僕」による絵の具の盗みが生徒たちによって仕組まれ、また先生も放置していた教室内の関係性の帰結であることを示唆している。事実関係が明らかになった後の先生の言葉は空所となっており曖昧だが、読者が何らかの仕方でこの空所を充填することを呼び求める。ここに、民主主義やキリスト教などの倫理的な観点が入り込む。だがいずれにせよ、この物語は学校＝共同体へと「僕」が加入するイニシエーションであり、真の主役は学校空間そのものにほかならない。教育という教育を近代社会は免れていない。この童話は、美学的装置を総動員してその仕組みを暴露しており、その回路によって談話「子供の世界」（一九二二）などに見られる有島の子ども論と接続されるのである。

11　表現という障壁――「運命の訴へ」

有島はこの手記形式の小説「運命の訴へ」を一九二〇年に構想し、執筆を開始したが中途で放棄した。語り手兼主人公の佐間田信次が、出身地の「谷」（やと）部落で起こった様々に深刻な出来事を自らの運命に算入するように語る。特に「業病」の家系であることが彼を蝕む。しかし、手記を書いた理由として「生に対する一路」を開く可能性を挙げていること、また、いわゆる額縁構造を採用し、手記ノートを小説家の「私」に手渡すことなどから、手記の公表という言語行為に意義を認めていることが推測できる。この方向で、再び有島は他者の運命と自己の魂とを同一視し、それを小説化することで生命力の顕揚を持続しようと試みたのだろう。だが、創作理念が転回する中で、階級的な障壁がそれを許容せず、その意識が深化して「宣言一つ」に至る芸術観の自己批判を導くことになる。この小説の中絶は、有島の創作史における転回の徴表と見なすことができる。

12　意識の流れの交響曲――『星座』

ハンフリーの「意識の流れの小説」の理論や、ジュネットの焦点化の理論などを援用して分析すると、『星座』は、内的独白文体を多用し、章ごとに焦点人物が交替する本格的な「意識の流れの小説」の達成として評価できる。まさしく『星座』は、「意識の流れ」の作家ウルフやジョイスの活躍した、一九二〇年代世界の文学史と同一歩調を刻むテクストである。学生寮・白官舎の住人である多数の学生たちの挿話の中から、おぬいの家庭教師を、星野から渡瀬を経由して園に受け渡してゆく中軸的な物語が読み取れる。有島的文芸様式の公式に従い、経済状態や性癖など自己内部・外部に葛藤を抱えた学生たちの代表として、クロポトキン『相互扶助論』（一九〇二）の読者である園が、おぬいとの結びつきを通じて問題をどう解決するかが期待されるが、構想によれば大長編連作となるはずであったこの小説は初

編だけで中絶した。しかし、有島の文芸様式の究極の達成として、このテクストにおける現代的な「意識の流れ」の技法の実践を認めるべきだろう。

13　言葉の三稜針――「或る施療患者」

短編「或る施療患者」(一九二三) は、ルンペン・プロレタリアートの主人公亀吉が、「生活の劣敗者」となるまでの人生遍歴と、最後に「踏み倒して生きる」生き方に目覚めるまでの同定を描く。その修辞技法の攪乱 (擬人法・中止法・省略形・脈絡の錯乱)、機械的・無機質的・破壊的印象の喚起 (感覚的・隠喩的手法)、心理内容の直接的表現などは、新感覚派を先取りし、未来派・表現主義の文体に通じるものである。自発的・自然発生的無政府主義の思想と、このような未来派・表現主義的文体とは呼応し、固有の文芸様式を形成している。「宣言一つ」以降、それ以前の文芸理念の自己否定に傾いた有島は、「惜みなく愛は奪ふ」などで表明していた未来派・表現主義への憧憬を、このテクストによって実現に移した。「連帯」の論理を印象派風に綴った最初期の「かんしゃく虫」と、この最晩年のテクストとの間で、有島の表現史は円環を閉じることなく転回したのであるが、むしろそのことこそが高い芸術史的意義をもつのである。

14　客――「酒狂」「骨」「独断者の会話」

本章では「或る施療患者」以外の最晩年に書かれた小説を検討する。短編「酒狂」(一九二三)・「骨」(同) は、作家らしき「私」に対して、主人公が「私」とは相容れない異質な理法に基づき、異質な領域に属する、絶大な異物感を帯びた身体として立ち現れてくる。特に「酒狂」は、中心の領域に侵入する周縁的な野蛮さに満ちた侵入者のミュートスを、椎名や安部のテクストと共有する。それは、カミュの言う不条理の拮抗を作り出すことになる。それらの要素は、総合してカミュの「客」に通じる。「客」的なテクストとは、目的を持たず、徹底した現在に繋ぎ止められる「ローファー」(有島) や「ダンディ」(カミュ) 的な人物像を描き、キリスト教＝マルクス主義的な「主義の人」の超コード化的イデオロギーに対するアンチ・テーゼとなる。有島＝カミュに共通のこの典型は、有島の「独断者の対話」(一九二三) とカミュの『シーシュポスの神話』(一九四二) で言及されるドン・ファンである。それは、未来の目的が失格した後に残る、現在における「量の倫理学」(カミュ) にほかならない。

補論　反啓蒙の弁証法――「宣言一つ」および小林多喜二「党生活者」と表象の可能性

戦後の「政治と文学」論争において、「党生活者」(一九三三) におけるいわゆるハウスキーパー問題は、「目的のために手段をえらばぬ人間蔑視」(平野謙) として批判された。有島は、「ホイットマンに就いて」以後の評論において、ロシア革命に触れる形で目的論・全体論の両面にわたり、マルクス主義の実践イデオロギーの問題点を、既に批判的に考察している。また「宣言一つ」における知識人による啓蒙の否定と、「泉」における、理性自体の内部に理性の暴走を抑制する否定性を確保する思想により、有島はホルクハイマー＝アドルノの啓蒙批判を先取りする位置にあった。そして有島の主体性 (当事者性) 重視の理論は、啓蒙のみならず表象全般を自己否定するに至るが、しかし、実際のところ、表象は常に可能ではないだろうか。表象不可能性の問題とは、疑似問題に過ぎない。「党生活者」もまた、モンタージュ、フィルム・ノワール、都市空間の文学として読む回路が残されている。透明なメッセージ、統一された主体というような、従来の論法における倫理基準を捨て、真に実践的に語る文芸的な営為の理論を、「政治と文学」論争を参照軸として展望することができるだろう。

論文審査結果の要旨

本論文は、小説を中心とする有島武郎の主要なテクストに鋭利な分析を加えたものである。論者は、文芸学における様式論を拡張し、テクスト自体の表意作用に周到な留意を払うテクスト様式論の立場に基づきつつ、創造的生命力、小説構造論、芸術史的転回、表象のパラドックスの４つの観点から、有島文芸の総体を縦横に論じ、印象派以後の芸術史的転回におけるその位相を明らかにしている。論文全体は、「序論」以下、「本論」全14章から成り、末尾に付論が置かれている。

「序論」を構成する３章では、有島文芸と20世紀以降の芸術史との相関、有島におけるホイットマンの受容、有島の後期の思想を論述の軸に据えて、本論文全体をとおして提示される有島文芸の総体に関わる結論的見解の総括がなされている。以下の「本論」部分においては、有島の個別のテクストを分析対象とした精緻かつ先鋭的な考察がなされる。第１章では「かんかん虫」を取り上げ、その文体と印象派絵画の手法との共通性に着目することをとおして、この初期テクストの構造を解明し、第２章は「お末の死」における悲劇の生成の物語構造を明快に指摘している。長編『宣言』を扱う第３章では、その往復書簡体小説の様式と物語内容との契合の様相を明らかにする。第４章は「カインの末裔」の主人公仁右衛門の存在性に周到な考察を加えることによって、永遠回帰のモティーフが折り込まれたこの小説の構造を解明している。第５章は『迷路』を取り上げた２節から成り、迷宮のイメージを中核として、この小説の備える多様な要素について縦横に論じる。第６章、第７章ではそれぞれ「生れ出づる悩み」「石にひしがれた雑草」に考察を加え、前者のメタフィクション構造、後者の人間関係小説の構造を軸としてテクストの様式を解明している。第８章を構成する３節は『或る女』を対象として、とくにジェンダー、レトリックの問題等を中心に分析を加え、テクスト様式の固有性を指摘している。第９章は「惜しみなく愛は奪ふ」を取り上げて、この評論をアヴァンギャルド芸術の理論として定位し、また第10章は「一房の葡萄」の新たな読みを提起する。「運命の訴へ」を扱う第11章では、この中絶した小説を有島の創作史上に位置づけている。『星座』「或る施療患者」「酒狂」「骨」他を取り上げた第12章以下の３章は、意識の流れ、未来派的文体、不条理等の観点から、それら有島晩年のテクストが有する可能性と意義を鮮やかに指摘している。

本論文は、以上のように有島武郎のテクストの総体に周到な分析を加えることをとおして、その文芸様式を20世紀以降の芸術史のなかに定位することを試みている。論述は精緻にして極めて説得的であり、とりわけ有島晩年の小説テクストのもつ可能性と意義を鮮やかに照射したその結論は、従来の定説的な理解に対する根底的な軌道修正を試みた優れた成果として、斯学の発展に寄与するところ多大なるものがある。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。